

「本当に人を愛せる人になりたい!」。私が創価の世界で、師匠・池田大作先生の思想にふれる中で芽生えた願いだ。私も池田先生のように平和のために戦う人生を歩みたいと考える中で他者への愛の重要性を感じた。愛は全ての幸福のための行動の源である感情だと思ったからだ。観念的ではなく、胸の奥から溢れ出てくるような本物の愛とは何で、どうしたら持てるのか。私はこの問いに少しでも近づくことができれば良いと思い、このコンクールに挑戦することにした。

私が選んだテーマ、「愛の領域の拡大」では主に二つの段階で対談が展開されているように思われる。一つ目に、女性の愛の特質とその可能性について。二つ目に、二つの異なる思想を例にとった考察だ。

まず、女性の愛の特質についてみていきたい。本書では両者が共通して、女性の持つ純粋で強い愛とそれに伴う独占欲と忍耐力に、平和社会建設への期待の意を示している。私はこの部分の読了を通して、池田先生が常々女性を大切にしてきた言動の根幹の考えを知ることができた。また生まれ持った女性本来の生命の尊厳を守り、育み、大切にしていく特質それ自体が、人類にとって普遍的な重要性を持つという部分に深く感動した。だから私自身、女性として生まれてきた事を誇りに思いこの使命を果たしていきたいと思った。

二つ目では、儒家と墨子における異なる愛のあり方についての思想を例に話が展開されている。儒家は、家族に対する愛を中心に他者に対する愛を漸減的に配分すべきであると、一方墨子は無差別的な兼愛を説いている。私は、この一見すると対局にある二つの思想は実は一つの精神発達の段階であることを学び、その一連の過程に共感した。

それに私は、この二つの思想について学校の授業などで浅くだが学んでいたのも、とても興味深く考えることができた。そして私自身もまず目指すべき道は、生活に密着した儒家の立場であると考えた。身近な人々を愛することを知らないままに、見知らぬ誰かを愛することなど不可能だからだ。私はしばしば身近な環境から目を逸らして遠くに幸せがあるように考えてしまう時がある。しかし今いる場所からのみ真実の愛も幸福も築かれていくのだから、これからは今いる場所で目の前の人に向き合い相手を理解していく努力をいく必要があるのだろう。そして偏狭であっても、真に深い愛を知ることができたならば、全人類を愛するという普遍的な墨子の立場への到達も可能になっていくと思った。この具体的な二つの思想は私の愛への大まかな理解を可能にした。また愛に対する課題が古今東西において普遍的であることを感じた。

加えて、仏教者である池田先生はここまで儒家と墨子の思想を軸に対話展開をしてきたがその最後に、墨子に比した仏教の偉大さについて述べている。一人の人間として他の思想を尊重し誠実に学びながらも、一人のリーダーとして仏教の素晴らしさをもきちんと明言する。この池田先生の巧みな対話の展開の仕方と心構えもまた、私を感動させた。私はここまで本文の内容について考えてみて、池田先生こそが万人に対する普遍の愛を持ちえた人格者であり、それこそが彼の行動の一つ一つを真に価値あるものにしていく所以であると思った。そこで「生きた愛の手本」である池田先生の姿について、私なりに考察していきたい。

私は生まれた時から先生の数多くの思想に囲まれながら育ってきた。それは先生ご自身の直接的な言葉や映像だけでなく、父母をはじめとする先生の多くの弟子たちの姿などからだった。したがって私の中の多くの精神的な部分は、先生によって創られてきたと思っている。だから幼い時からずっと「池田先生はすごい人」だと、よく分からないなりに思ってきた。しかし、私が創価学園で先生について学び、自らも挑戦していく中で先生の偉

大きに対する尊敬の念は確かなものになった。その中で特に私が尊敬している池田先生の二つの偉大な点がある。

それは一点目に、どこまでも目の前の一人に対する心配りを忘れられないことだ。一度も会ったことのない地球の反対側に住むような人に対しても、常に深い祈りと慈愛の行動を貫かれている姿は多くの人々の希望の光となっている。私も、悩みに打ちひしがれている時には、この先生の「私への愛」を感じる事ができたから再び立ち上がる事ができた。この「本物の励まし」は、一見すると万人に対して贈られているようだが、きちんと一人一人の胸の奥に届いていくから不思議である。

二点目に、自己を顧みないまでに人々に尽くされる姿である。先生は詩・「大空を見つめて」の中で、「君たちのためなら私はいかなる迫害もいかなる中傷もいかなる試練もまったく眼中にない」と断言されている。そして行動においても人生の全てを全人類の平和と幸福のために費やされている。

その偉大な師匠を持つ一方で自分自身を見つめてみると、身近な人々に対しての「本当の愛」を実感することは今の段階でできていないように思う。例えば私は友人に何か親切をしてあげる時、相手からの信頼や好意など何らかの見返りを求めてしまう。それは百パーセント間違っているのではないと思うが、そこには相手への行動の限界があるし、相手の反応に依存しているから常に不安定である。だからこれは、「本当の愛」とは決して言えないだろう。

他にも私は以前友人関係の中で、単に相手から信頼を得るためのために優しい言葉を掛けたり、行動したりしてきた。しかし残念ながらその時に、彼女たちとの間に本当の信頼関係は築くことができなかった。それは私から、彼女たちを信頼し、愛せていない上での関係だったからだと分かった。この経験から、私は「愛している」という言葉が簡単に口から出てくる時代にあって、「本当の愛」を見つけていく事はとても難しく、また非常に大切な事であると思う。

私はこの本を通して愛について自分なりに考えていく中で、「本当に人を愛する」ということがいかに難しいことであるのかを知った。だからこそ、これからの人生において身近な一人と誠実に接する努力を怠ってはいけないと思う。将来看護の道を志す私は、必ず普遍的な池田先生のような愛を持った女性に成長していきたい。またこのコンクールに挑むにあたって、師匠の偉大さを改めて実感することができたことに深い喜びを感じる。

以上